

## ナシのカメムシ類

### 1 形態と生態

ナシを加害するカメムシは数種類ありますが、県内の予察灯への飛来はチャバネアオカメムシが最も多く、クサギカメムシも比較的多く誘殺されます。その他少数ですが、アオクサカメムシ、ツヤアオカメムシなども誘殺されます。

#### (1)チャバネアオカメムシ

体長 10～12mm で光沢のある緑色で、前翅は紫がかかった茶色をしています。成虫は落葉下で越冬します。発生は年に2～3回で、最大でも3回ですが、成虫の寿命と産卵期間が長いので各世代が混発しています。

広食性で、4月から夏にかけてはクワ、サクラ、ヒイラギ、キリなどに、夏以降はヒノキ、スギ、キリなどに寄生します。

4月からナシや多くの果樹を加害しますが、いずれの樹種でも繁殖せず、ヒノキやスギが主要な繁殖植物(繁殖に適した植物)として知られています。

#### (2)クサギカメムシ

体長 13～18mm とやや大型で、暗褐色の地に、不規則な黄褐色の斑紋があります。大きさや体色にはかなり変異があります。大木の樹皮の下や小屋の壁などの隙間で成虫が集団で越冬し、発生は年1～2回です。

広食性で、4月以降にマツ、スギ、サクラ、ケヤキなどに集中して飛来し、その後は好適な餌となる植物へ分散し、寄生します。ナシや多くの果樹を加害しますが、いずれの樹種でも繁殖せず、クサギ、クワ、キリ、ダイズなどが繁殖植物として知られています。



写真1 チャバネアオカメムシ成虫



写真2 クサギカメムシ成虫

### 2 被害の様子

ナシ園に飛来し、果実を吸汁します。幼果期から加害を受けると、吸汁部がへこんでひどい奇形果になります。収穫直前の被害では、くぼみの程度は軽くなりますが、吸汁部周辺の果肉は白くスポンジ状となり商品価値が低下します。



写真3 被害を受けた果実



写真4 果肉部の症状(スポンジ状)

### 3 発生について

ヒノキやスギがカメムシ類の主要な繁殖植物のため、ヒノキ、スギが植栽されている山間及び丘陵地帯のナシ園で多発する傾向にあります。また、ヒノキやスギの花粉飛散量が多く、球果が多い年の翌年に多発する傾向があります。なお、同一園内では周辺部の樹で多く発生し、特に、園の外縁部にカメムシ類が寄生する着果性樹木(イヌツゲ、サンゴジュ、ヒバ類、クワ等)があると、カメムシ類が園内に侵入しやすくなってしまいます。

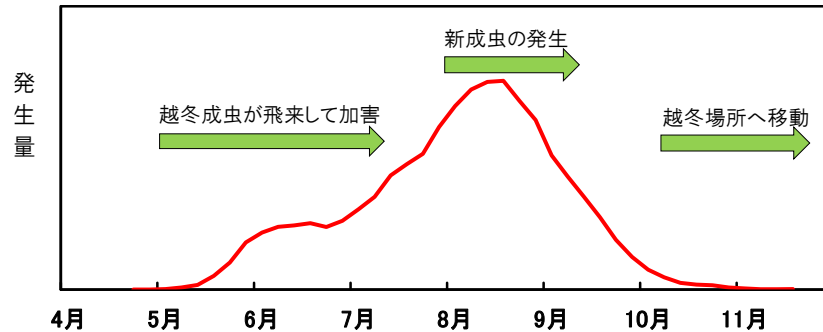


図1 ナシのカメムシ類成虫のナシ園における発生消長(県内予察灯への誘殺数※の推移を基に作成)  
※チャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、アオクサカメムシ、ツヤアオカメムシの合計値

### 4 防除時期と防除方法

#### (1)物理的防除

- ア 多目的防災網及び防風網で園を覆うと、カメムシ類の侵入防止効果が高くなります。
- イ チャバネアオカメムシの回避には黄色忌避灯の設置が効果的です。

#### (2)耕種的防除

- ア ナシ園の周辺にある着果性樹木の刈り込みを良く行い、枝が防風網に接触しないように注意します。

#### (3)薬剤防除

- ア 幼果期の被害が大きいため飛来初期の5月上旬から7月までの防除を徹底します。
- イ カメムシ類は園外から飛来し、発生状況は地域や園により異なるため、園内外を見回り、早期発見、早期防除に努めることが重要です。
- ウ 防除薬剤は、合成ピレスロイド系薬剤の防除効果が高いですが、多用すると天敵類の活動に影響するほかハダニ類等に抵抗性が発達する恐れがあるので、有機リン系及びネオニコチノイド系薬剤を主体に使用します。
- エ 農薬散布は、ナシ園への飛来が多い夕刻又は活動の鈍い早朝に行うと効果が高くなります。
- ☆スピードスプレーヤーを使用した防除ではドリフトしやすいので、風のない日に飛散防止対策を講じた上で、散布してください。

#### 薬剤防除を実施する場合は、

- 最終有効年月内の農薬を使用し、ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を必ず確認してください。
- 適切な薬剤を選択し、病害虫が抵抗性を獲得しないように、同一系統薬剤の連続使用を避けてください。
- 農薬を散布する際は飛散しないよう対策を講じてください。

■ 発行 平成28年2月 埼玉県農産物安全課、一般社団法人埼玉県植物防疫協会  
■ 問合せ先(原稿執筆)

埼玉県農業技術研究センター生産環境・安全管理研究担当 TEL048-536-0409  
埼玉県病害虫防除所 TEL048-539-0661



©埼玉県 2005

彩の国埼玉県